

「宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部」の“今”を伝えます

報道関係各位

2011年12月



【作者】イラストレーションコース3年 生田 恵梨 さん(左)
イラストレーションコース3年 富田 千尋 さん(中)
イラストレーションコース2年 酒井 未久 さん(右)

「歌舞伎町 X'mas コンサート」で披露した学生のライブペイント作品です。
詳細はP6. をご覧下さい。

<宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部に関する情報のお問合せ>

宝塚大学 東京 新宿キャンパス 広報室

担当:金澤、山本 TEL:03-3367-3411

<ご掲載・写真データ等に関するお問合せ>

宝塚大学 東京メディア・コンテンツ学部 広報事務局 共同PR株式会社

担当:江頭、高橋 TEL:03-3571-5228

大船渡市の被災企業にアイデア提言



川村 順一 学部長 (左)、紺野 祐花さん (右)

東日本大震災で被災した岩手県大船渡市の企業の再建に向けてアイデアを提言するツアーに、川村 順一 学部長と紺野 祐花さん (アニメーションコース 3年) が参加しました。このツアーは東北銀行、監査法人のトーマツが中心となり、震災復興支援活動の一環として、首都圏の大学教員や学生らが岩手県内の企業に事業のアイデア提言を行うことを目的に企画されました。

第一弾として、11月末に岩手県の被災企業の中で復旧の目途が立った大船渡市の水産加工業、森下水産と、菓子メーカー、さいとう製菓の工場を総勢 15名の参加者が訪れ、被災時の状況や事業が再開した様子などを見学して意見交換を行いました。

紺野 祐花さん：

私は大船渡市の実家に母がおり、震災後に大船渡へは3度行きました。4月に地元に戻った際には、覚えていた風景が無くなり、瓦礫だらけの状況を見て言葉を失いました。近所の人たちもそれぞれ避難していてあまり話すこともできず、地元のみんなの暮らしぶりについてもわかりませんでした。私自身は東京にいて、震災そのものは体験しませんでした。東京にいと、全てが無くなってしまった郷里の現状については、虚無感からかできるだけ考えまいという気持ちがどこかにありました。



森下水産で説明を受ける参加者

今回のツアーに参加したことで、半年経ってもほとんどの企業がまだ復旧に至らない現状や、“もっといいものを作って” “もっといい暮らし” をという現実の問題に対して地元企業が動き出していることを実感でき、私も少しずつ現実に向き合えるようになりました。訪問先の企業では、例えば、さいとう製菓のお菓子の包み紙にQRコードを入れ、携帯電話からさいとう製菓の復興状況やコンテンツを見ることができるといような案も出ており、これからもっと様々なアイデアが生まれてくれれば良いと思います。

川村 順一 学部長：

ボランティアという言葉はともすると誤解される部分もありますが、お金について枠組みを意識しないと継続は難しい、と経験的には思います。今回のツアー後には、例えば東北の復興に関わりたいという参加者でネットワークを作り、継続を目的に収益を立てて事業化してもいいのでは、という話も挙がりました。すでにツアー第二弾が来年に向けて企画されていますが、将来的には学生がツアーに参加する際の支援ができるプラットフォームができたら良いと感じました。

1.HOT TOPICS－②

【寄稿】

「現地の人々に映画を観てもらおう」成田 裕介 教授

3月11日のその時、汐留で開催されていた「卒制祭」という日本テレビ映画技術協会主催の学生映画イベントの真っ最中でした。本学の学生も多数参加しており、その時は丁度映画の上映中でした。スクリーンがぶれ始め、やがて上映中の映画がフレームからはみ出したあたりで、上映がストップし場内の灯りが点灯したのです。場内にはおおよそ300名程の各学校の学生と教職員が参加しておりました。慌てて会場外に飛び出す者、うずくまって泣きだす女学生、動けないでおろおろする者と場内は一時パニックに陥ったのです。ともかく全員の無事と安全を確認出来たのは幸いでした。しかしその後、主催者は状況の把握とイベントの続行の判断に迫られました。結果、安全に帰宅出来る者は帰宅し、それ以外の者は残ってイベントを最後まで続けるという判断をしたのです。ご存知のように、あの時は全てと言っていいほど情報が寸断され、帰宅困難者という多くの人々が一夜を明かしたのは周知のことです。ともあれイベントは最後まで行われ、余震の続く中帰宅出来ない学生たちの為、懇親会の形で夜を過ごしたのです。翌日から明らかになる被害状況は、正に想像を絶するものだったのは言うまでもありません。

あれから9カ月。幾多のスローガンがマスコミに踊りました。「ガンバレ！東北」「負けるなニッポン！」「pray for JAPAN」「オールニッポン」等々。どれも正しいのですが、どうもシックリ来なかったのは、私だけではないと思います。

私は映画に関わり始めて約35年です。最早若手とは呼べない年齢になりましたが、映画人としてこの災害に直面し何が出来るかを仲間と話し合いました。ある者はカメラを片手に現地に飛んだ者もいましたし、ある者は積極的にボランティア活動に参加した者もいました。私たちは映画を創り、多くの人々に観てもらおうことを生業としています。従って、「現地の人々に映画を観てもらおう」という結論に至ったのです。

映画の公開形態は複雑です。単に映画（DVD等）をプロジェクターでかければ良いという訳にはいきません。今回の場合、被災地にも間違いなく映画の興行を生業にしている被災者の方々がいらっしゃいます。その復興の妨げになることはあってはならないのです。

私は監督協会に加入しておりますが、同時に映職連という映画に関わる職能団体にも加入しております。その映職連の仲間たちと被災地である宮古市のシネマリーンという映画館で映画を上映することになりました。作品は深作欣二監督作品「蒲田行進曲」です。映画は映画館でという支配人のポリシーでフィルムで上映することになりました。私たちがやることは前日に宮古市に入り、広報・宣伝をすることです。



期日は10月24日(月)、2回の上映と崔洋一監督のトークショーを交えてのイベントとなりました。当日は平日にもかかわらず多数の方々がお見えになりましたが、中には映画を観て涙ぐんでいる方もいて、イベントは大成功でした。支配人さんは「こんなに入ったのは震災以来初めてです」と仰っておりました。ともかく、映画を通じて被災者の皆さんに多少なりとも感動を届けられたのは幸いです。

被災地の夜は灯りがありません。家々に生活の灯りが無いのです。ガレキは撤去され一見片付いているように見えますが単に集積したに過ぎません。残っているのは辛うじてそこに家があった証である土台のみです。あれ以来9カ月以上も経つのに何も変わっていない現実。そして被災者にはこれが日常なのです。今後も続けられる限り、活動を続けていきたいと思っております。

(映画コース 成田 裕介 教授)



上映会の一コマ

1.HOT TOPICS－③

似顔絵チャリティーイベント開催

イラストレーションコースの学生たちによる『青い鳥原画展』（11月15日～29日、小田急百貨店新宿店）が好評のうちに終了しました。原画展の開催期間中、東日本大震災復興支援の一環として募金をしていただいた方の似顔絵をエコバッグに描くチャリティーイベントを行い、食事や買い物で同店を訪れた親子連れやお年寄りたちが似顔絵ブースに立ち寄り、チャリティーイベントに参加していただきました。

似顔絵をエコバッグに描くチャリティー活動は、“震災後の今の日本を少しでも明るく元気にしたい”との思いからイラストコースの学生たちが開催した『e顔バッグ展』から引き続き実施しているものです。一般的に似顔絵は色紙に描くことが多いのですが、エコバッグに描くことでチャリティー参加者にエコ意識を高めてもらうことも目的としています。

参加した学生たちは、募金をしていただいた人々とコミュニケーションを取りながら、単に見たままの似顔絵を描くのではなく、その人の雰囲気や人柄を感じさせる“笑顔”をエコバッグに表現していました。

なお、「青い鳥原画展」の似顔絵チャリティーイベントで集まった募金は、義援金として日本赤十字社に寄付いたします。

生田 恵梨さん（3年）

「お客さんとコミュニケーションがたくさん取れたことが楽しく、そして良い経験になりました」

秋葉 美津希さん（3年）

「人前で、しかも描く対象であるお客さんを目の前にして似顔絵を描いたのは初めてでした。ものすごく緊張しましたが、喜んでいただき私も心が温かくなりました」

大場 恵利佳さん（3年）

「家族や友達以外の方と触れ合えるとても良い機会になりました。改めて似顔絵を描く事はとても難しいと気づかされたので、今後もより一層のスキルアップを目指していきたいと思います」



子どもをあやしながら似顔絵を描く学生



似顔絵チャリティーの様子

青い鳥原画展

1.HOT TOPICS－④

歌舞伎町X'masコンサート



クリスマスコンサートの様子

渡邊 哲意 准教授が中心となり、企画、運営、演出を手がけた「歌舞伎町X'masコンサート」が、18日、新宿シネシティ広場で開催されました。

「歌舞伎町X'masコンサート」は、歌舞伎町を誰もが安心して楽しめるまちに再生する取り組み「歌舞伎町ルネッサンス」の一環として開催され、今年は東日本大震災の復興支援イベントとして、会場で被災地支援の募金活動が行われました。

本学からは、イラストレーションコースの生田 恵梨さん、富田 千尋さん、酒井 未久さんが、バンド演奏中に即興で絵を描く“ライブペイント”を披露しました。また、女子大生ピアニストRioと11歳でソリストデビューした中学生の少年バイオリニストSyugaのユニット「Rio&Syuga」、青山学院大学の学生たちによるコーラスなど、総勢4組の出演者たちが、ピアノ&バイオリン、ライブペイント、コーラス、ビッグバンドで会場を盛り上げました。

参加したイラストレーションコースの学生たちからは、「クリスマスソングを聞きながら、頭の中でイメージを膨らませて即興で描きました」「心が温まる音楽が絵を描いていて心地良かったので、それをそのまま絵の中で表現しました」「来年は一人でも多くのひとの願いが叶えばいいなと思います」、などの感想が聞かれました。

本学は2011年9月、「歌舞伎町タウン・マネージメント*広報大使」に就任しました。今後とも本学部の特徴を活かして歌舞伎町のまちづくりに貢献してまいります。

* 歌舞伎町タウン・マネージメントは、歌舞伎町のまちづくりの担い手として、地元・事業者・警察・消防・新宿区等が一体となって、歌舞伎町ルネッサンス（環境美化、文化の発信、地域活性化、まちづくり計画）の実現に向けた取り組みを行っています。



ライブペイントの様子 ※完成作品は表紙に掲載しています

1.HOT TOPICS—⑤

在校生・卒業生が本音のトークセッション

在校生・卒業生 14 人が学生生活や就職活動、社会人生活について語るトークセッション「ココから始める 私のミライ」が 17 日、「冬のオープンキャンパス」体験入学・入試相談会の中で、開催されました。

マンガ、イラスト、ゲーム、アニメコースの 3・4 年生のほか、今年 3 月に卒業した東京メディア・コンテンツ学部第 1 期生の社会人・大学院生が、本音のトークを繰り広げました。

当日は、宝塚大学に興味のある高校生のほか、来春の入学が決定している高校生が、大学生活の情報を得ようと、熱心に聞き入っていました。

トークセッションは、司会を務めた渡邊 哲意 准教授が、舞台上の 14 人に質問を投げかける形で進行しました。

『大学で学んだことは？』という質問には、「自分のレベルを認識できた」、「ゲーム制作の共同作業を通じて、他のメンバーと話し合うこと、完成へ向けてのスケジュールリングの重要性を学んだ」、「アニメを見る側だけでなく、創る側の視点を持てるようになった」といった声が返されていました。

また、『校外活動も含めて、学生時代にやってきたことは？』という質問には、「イラストコースの作品集の企画・編集に携わった」「マンガの公募に作品を多数応募し、賞金総額 50 万円を稼いだ」「単行本『マンガでわかる公認会計士』の表紙絵等の作画を担当し、商業デビューした」など、学生たちの多種多様な活動が紹介されました。

『大学で学んだことが、社会に出て役立ったことは？』という質問には、ゲームコースの卒業生が「この大学には個性的な人ばかり。そういった人達とのチーム制作は楽ばかりでなく、困難もあった。しかしその経験によって、人のタイプ毎にどのような対応をすればプロジェクトが円滑に進むかを学べた」と回答。大学時代のプロジェクト経験が、現在も役立っていることを説明しました。

『「大学」とはどのような存在か』という最後の質問には、「自分から様々なことにチャレンジする自由な時間を与えられている場所」、「刺激をもらえる場所。入学前は自分が一番絵がうまいと思っていたが、周りの友達にもすごい人がたくさんいて、自分はまだまだということに気づけた」、「第 2 の家のような存在。友達、先生との距離がとても近く、いろいろなことが相談できる」など、それぞれの「宝塚大学」への思いが込められ、トークセッションは大盛況のうちに終了しました。



トークセッションに参加した在校生と卒業生たち



コーディネーターの渡邊 准教授

1.HOT TOPICS—⑥

竹内 一郎 教授 作・演出 「リーディング 明日咲く」

竹内 一郎 教授（マンガコース）の作・演出による『リーディング 明日咲く』の公演が 15 日、新宿ゴールデン街劇場で行われました。

1945 年（昭和 20 年）の陸軍航空隊・知覧基地のそばの旅館を舞台に、特別攻撃隊として出撃を命じられた 4 人の特攻兵がそれぞれ人生を回顧しながらストーリーが展開されます。明日「散る」ではなく「咲く」命だという隊員たちの想いや、日常の“ただ生きてあることの奇跡”について思わずにはられない公演となりました。

竹内 一郎 教授 コメント：

「東日本大震災」という大きな悲しみが襲った 2011 年の終わりに、命の尊さに触れられる作品を上演したいという衝動にかられました。自作品の中で、もっとも＜命＞に向き合った戯曲です。

観客からも、励まされたという声がたくさん聞きました。また、大学院一年の川端新さんのイラストで清新なチラシができました



イラスト：川端新（大学院 1 年）

■あらすじ

1945 年（昭和 20 年）8 月。

鹿児島県にある陸軍航空隊・知覧基地のそばにある

「永久旅館」。4 人の特攻兵が、翌日の出撃命令を受けて、末期の酒を飲んでいて、

特攻前夜に、4 人は何を信じたのか、何を伝え合ったのか。

東日本大震災という大きな悲しみが日本を覆った 2011 年の終わりに、

ただ生きてあることの奇跡に、いま一度気付いてみたい。

■竹内 一郎 教授 今後の公演予定

タイトル：『プルシアンブルー』

場 所：サンモールスタジオ

日 程：2012 年 5 月 23 日～5 月 27 日（予定）

作：竹内 一郎 / 演出：岡本 高英

タイトル：『日本アニメ（ジャパニメーション）. 夜明け前』

場 所：新宿紀伊國屋ホール

日 程：2012 年 10 月 4 日～7 日（予定）

作・演出：竹内 一郎

2.各コース紹介

授業紹介

背景美術（水彩系）〔受講学年：メディア・コンテンツ学科 1年（選択課目）〕

背景美術Ⅱ 〔受講学年：アニメーションコース 2年（必修課目）〕

担当教員：松平 聡 講師

アニメ制作において、背景美術は作品の世界観を決定する重要な仕事です。適切な背景を描くためには、基礎的な画力が必要です。

現在のアニメ制作現場では、背景はペンタブレット等を使い、パソコンで描かれるケースが非常に増えています。しかしながら、実際に筆を持って背景や絵を描いた経験が乏しいと、パソコンでも上手く背景は描けません。

1年生の選択課目「背景美術（水彩系）」では、アニメの背景制作の現場で使用しているポスターカラーを使用しながら、手描きによる様々な作画法を学び、描く技術を養います。

“木”の描き方を学ぶ回では、学生が手本を見ながら、緑の生い茂った木を描き上げる授業が行われました。松平 講師は学生の元を回りながら、「下書きの段階から葉の重なりやボリュームを意識すること」「木々の影を描く場合は緑の色のトーンをただ落とすのではなく、青や紫などの色を混ぜることで、豊かな色感を表現できる」など、学生ひとりひとりに丁寧にアドバイスをしていました。

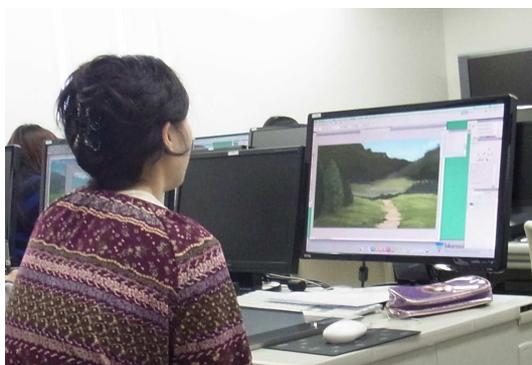
「背景美術」のもうひとつの授業「背景美術Ⅱ」では、ペンタブレットを用いた背景の描き方を学びます。

“草原の小路”を描く回では、「山の稜線が本来でこぼこなのに比べて、自分の描いた絵はなだらか過ぎないか」といった点を例に挙げ、「自然物の表情」を意識することの重要性について講義しました。

また、「目の前の手本をただ書き写すのではなく、その木が何の木か、葉はどのように生えているかなど、特徴を調べることが重要。その調査を踏まえた上で背景を描くと、さらなる深みが生まれる」と、“調べて描く”ことで一段上の背景を描けることにも言及しました。



手本を描く松平先生



タブレットを用いて、背景を描く学生

3.教員紹介

たちばな いさぎ 講師

南三陸町へクリスマスカード

「宮城県南三陸町へクリスマスカードを送ろう企画！」と題して、学生たちがクリスマスカードを作成し、被災地に送り届けるキャンペーンをこのほど実施しました。この企画は、私の友達である鈴木 初音さん（シンガーソングライター、FM「ブルー湘南」ラジオパーソナリティー）が、南三陸町の避難所へ救援物資を届ける活動をしている中で、“サプライズで現地の人たちにクリスマスカードを贈りたい”と話していたことをきっかけに持ち上がりました。

応募を呼び掛けてから締め切りまで時間があまりない中、マンガコースだけでなく他のコースの学生たちも参加してくれたおかげで 10 通のクリスマスカードが集まりました。当初、学生の中には、「頑張って」などの応援メッセージを書くことは酷じゃないか、という反応もありました。しかし、鈴木 初音さんから、「壁に貼ってある応援メッセージやポスターを避難所にいらっしゃる方々が一日に何度も見て喜んでいる」、「避難所にいる方は自分たちが気にかけてもらっている、忘れられていないということが嬉しいのだ」という話を聞き、私たちはまず想いを伝えることが大事だと気づかされました。学生たちが、自主的に参加してくれたことがとても嬉しいです。



たちばな講師（右から2番目）と学生たち



集まったクリスマスカード

林崎 典子さん（マンガコース1年）

「被災地にボランティア活動をしに行くことができないので、せめてカードを贈りたいと思い、クリスマスカードを作りました。」

なお、集まったクリスマスカードは、一般社団法人 Japan 元気塾が運営する東北復興サポートセンター「Hamanasu」を通じて南三陸町の避難所へ届けられます。

<たちばな いさぎ 講師 プロフィール>

神奈川県横須賀市生まれ。高校卒業後、横浜簿記専門学校入学。簿記専門学校卒業後、建設機械製造会社に入社、イラストの仕事・漫画家アシスタントを兼業。二年間の勤務後、白泉社「花とゆめ」誌で漫画家デビュー。結婚・出産後、あおば出版より「ハムハムえぶりばでい」出版。ベネッセコーポレーションでDM（ダイレクトメール）漫画を執筆。白泉社「silky」誌でドキュメンタリー漫画の仕事のほか、「ナチュラル～障害はあたしのブランド～」(共著・中経出版)、「あにスペ」誌（イースト・プレス社）で「ひなたの風景」の連載を開始。「あにスペ」休刊後、2010年4月に「ひなたの風景～聞こえる、犬や猫たちのSOS～」(イースト・プレス社)を出版。2008年より、宝塚大学 東京新宿キャンパス マンガコースの講師を務める。

4.今後の予定

■「冬のオープンキャンパス」体験入学・入試相談会

日 時：2012年1月21日（土） 12：30～15：30

会 場：宝塚大学 東京新宿キャンパス（東京都新宿区西新宿）

時間	内容
12:30～	大学紹介DVD上映・入試説明
13:00～	特別講演「プロの仕事とは？」 ーマンガ家 佐藤秀峰 先生の売れるマンガの創り方講座 ー
14:30～	コース紹介・体験授業
15:30	終了予定

■特別講演「プロの仕事とは？」

「海猿」「ブラックジャックによろしく」のマンガ家の佐藤 秀峰 氏を迎え、売れるマンガの創り方について語っていただきます。

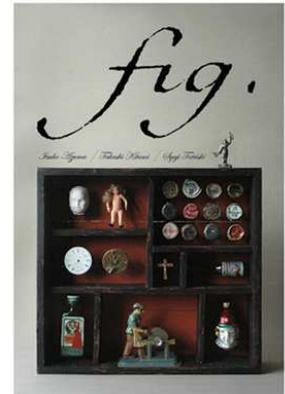
<作品展>

■ 東逸子・北見隆・建石修志「fig. 玩具図譜」

期 間：12月15日（木）～12月24日（土）

会 場：スペースユイ（東京都港区南青山）

内 容：クリスマスを意識して、玩具を素材とした立体、平面作品などの作品を揃えた、ギャラリー恒例のクリスマス企画展。本学からは、イラストレーションコースの北見 隆 教授が出展します。



■ コレクション・オブ・アート・イラストレーション展 (メルヘニズム ～夢の記述～)

期 間：12月22日（木）～12月28日（水）

会 場：東武百貨店 池袋店 6階 美術画廊（東京都豊島区西池袋）

内 容：本学イラストレーションコースからは、北見 隆 教授、城芽 ハヤト 講師、高田 美苗 講師、吉田 光彦 講師の4人が出展します。

